

「素材そのものを活かす木工製品」

社会福祉法人北光福祉会 遊友ほたる 前管理者 六車 潔

URL <http://www.hokko-fukushi.or.jp/office/>



『自然のやさしさを、暮らしの中に 木製おもちゃからインテリア雑貨まで木のあたたかな手触りウッドクラフト 木のまちならではの工芸品 かつて林業が盛んであった頃に誕生したウッドクラフトを継承して、新たなアイテムをたくさん登場させています。樹種そのものの色を活かし、自然の木目とやさしい手触りが、他のものと違うぬくもりを感じさせてくれます。』

知的に障がいのある人たちの入所施設として向陽園は昭和53年に開園し、社会自立に向けて様々な指導・訓練を開始しました。



(作業場全景)

地元の木工場への就職に向けた実習を推し進めるとともに、園内では木製アイスクリームスプーンの袋詰め、割箸の袋詰めなどの受託作業、よしず編みや中古車洗車、木工の他、自主開発による作業を行ってきました。そのような展開の中で、どんなに障がいが高くても働くべきであるという、かつての指導訓練の考え方を平成10年度に根本的に見直しました。作業支援対象者を、60歳未満で今現在又は近い将来において働くことが理解できる、あるいは見込める者、または働きたいと意思を表明した者に限定して、作業種も木工玩具製作、ハッカ・ドライフラワー製作作業の3種に絞り、現在に至りました。

現在は、利用者平均20名程度の共同作業所として独立させ、障害者総合支援法に基づく就労継続支援B型事業所「遊友ほたる」定員16名と、生活介護事業所「遊友やすくに」の一部利用者に対する生産活動支援などを加えて運営しています。

木工作業は、昭和58年4月、大工の経験のあった職員が試行を始めました。その翌々年の昭和60年、伊藤英二氏(木のおもちゃ作家。西興部村「森の美術館木夢」元館長。故人)が、地元安国中学校で教諭勤務のかたわら、地元公民館主催の木のおもちゃ作り講座を開いたことを契機に、安国木考研究会が発足し、町

ぐるみで木のおもちゃ作りがスタートしました。これを機に町民の間に広まった木のおもちゃ作りへの熱意に同調し、その技術指導を受けながら、木のおもちゃ作りが始まったのです。

その成果として、平成4年1月、第6回授産施設小規模作業所障害者コンクールに出品し、木工乳幼児玩具「あかちゃんのおもちゃ箱」が北海道知事賞に、平成7年1月、「象・キリンの椅子3点セット」も同賞に輝きました。



(知事賞 ゾウの椅子大・中・小)



(知事賞 キリンの椅子大・中・小)

また、販売先の開拓、バイヤーとのつながりを目的に「オホーツク木のフェスティバルin北見」には毎年参加してきました。

平成22年度には、北海道補助金「障害者自立支援基盤整備事業(大規模生産設備整備)」により「レーザー加工機」を導入し、コースター、表札、色紙、文字積み木など、新製品開発に大きく貢献しています。



(レーザー加工機の本体)



(レーザー加工による試作品)



(レーザー加工による試作品)



(サンドペーパー磨きの様子)

●木工製品のポリシー

樹種はセンノキ(栓, ハリギリ刺桐)を主として用いています。センノキは木目が美しく、あまり堅くはなく加工は容易で、軽量の割には強い材とされています。

その他は、オンコ(イチイ), カツラ, エンジュ(槐)などを、それぞれの樹種固有の色合いを製品デザインの一部として活かすために用いています。例えば、動物などの目, キリンの身体の模様は、色濃い樹種の丸棒を埋め込みにしています。このようにして、着色は一切しないことを頑なに守ってきています。木そのものの良さを殺さないようにしたいという願いからのこだわりです。



(ゾウの輪投げ(小)耳の素材が違う)



(ヘリコプター ローターの素材はカツラ)



(丸棒 埋め込み模様)

塗装は、クリアラッカーをしますが、木のおもちゃについては幼児が舐めることも想定されることから、無塗装の製品も用意して、購入される方が選ぶことができるよう配慮しています。

伊藤英二さんが設計し、作った木のおもちゃは、どれも「ストロング(丈夫であること)」、「シンプル(子どもの目線に立ち、構造が単純であること)」、「セーフティ(安全性が高いこと)」であるという「3S」の考えに基づいています。当作業所も、これを守り、質の良い木製品を常に目指して生産しています。



(三輪車 (非常に手がかかる))



(クリアラッカー仕上げ)

●原材料の調達

主たる原材料としているセンノキ(栓, ハリギリ刺桐)の調達は、年々難しくなっています。まして

や、幅広の板材となると尚更です。

木材加工業者が減少の一途を辿っていること、加えて自生地が山奥に点在することから、造材作業が困難かつ費用増大であるため当然として価格も高騰していると聞いています。

今後については、センノキ集成材の一部利用、あるいは主たる樹種の変更も検討しており、スギ材の芳香を活かした製品の開発へ思考・試行へ踏みだしたところ です。



(センノキの板材)

●販路の拡大・確保

地元イベントへの出店（遠軽虹の広場、神社祭典、ふれあい広場、など）や各所における直販出店の機会では、良い品だと評価はしていただいています。経済不況の影響か財布のひもが固く、売れ行きは低迷というより、年々低下の一途を辿っています。

かつて新千歳空港内の福祉の店「ルピナス」（千歳市社会福祉協議会運営）は賑わいを見せていましたが、世の景気の低迷に合わすかのように閉店へ追い込まれてしまいました。

現在は、本州方面にも継続的な取引先がありますが、細々としたものです。最近になってデパート催事場企画会社との取引が継続的にできるようになり、徐々に拡大しつつあります。



(積み木のサンドペーパー磨き)



(輪投げ ゾウとキリン)

●福祉的作業所としての展望

知的に障がいのある方は、概して高度で判断を要する作業、危険性の高い作業などは難しく、作業できる内容は極めて限定的です。そのため、製品化へのハードルは非常に高いものがあります。即ち、精度の高いものを大量に生産することはなかなか困難であり、生産委託側の要求との差異が余りにも大きく、受注に結びつくことが少なくなってしまう。

当作業所利用者のH・Aさんの糸のこ切断は、手直しがほとんど必要ない滑らかな切り口、一般熟練者とも肩を並べても良い卓越した技術を持っていますが、しばしば精神的不調に陥り、生産が停止することもあり、生産の安定性において常に不安があります。



(糸のこ切り抜きの名人)

また、働くことに対する意義や意識が弱い方も多く、特に若年者への一般就労に向けての意欲高揚の支援も併せて行うことが課せられています。さらには、中高年者の生きがいとしての作業活動という面も保持しなければなりません。

このように、利用者の特性などに支援を続けながら、生産と販売をマルチにこなすことは困難性が大きいものがあります。

本誌2014-6に搭載された稚内第一木馬館さん、2014-8旭川美景園さんと同種ですから、課題や悩みには共通することが多くあります。それぞれが培ってきたノウハウやつながりを共有化するためのネットワークが、今後の発展に必要と考え、まずは生産の相互委託を積極的に進めることができればと考えています。